慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「杜甫・秦州時代における隠逸的傾向の主因について」
Sub Title	Tu Fu, Reclusive trends in his Rinzhou period
Author	人見, 豊(Hitomi, Yutaka)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1980
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.41, (1980. 12) ,p.47- 65
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00410001-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「杜甫・秦州時代における隠逸的傾向の主因について」

人見　豊

はじめに

隠逸

果たす果たさないは別にして、古来、中国文人一般に関して、このことを云々するのは非常に難しい。というのも、我々は、このことを口にする文人自身がどこまで真剣にその実現を考えているか判らないからである。現世に汲々とした人間でも、一方で隠逸に関することを口にするからである（これは一種の中国文人の取る常套的な形であるが）。である以上、それを踏まえた上でこのことに取り掛からねばならないことは言うまでもない。

一

この時代の杜甫の隠逸的傾向（隠逸・隠棲への思いという概念も含む《以下便宜的に隠逸的傾向とのみ記す》）ということに関しては、これまでに、鈴木修次氏「秦州時代の杜甫の詩」[1]にその詳細に渡る優れた研究があるが、私は同氏が

この書で言及されておられる隠逸的傾向の主因について、かねてより疑問の念を抱き、今ここに上記のようなテーマを挙げて論ずる次第である。

杜甫における秦州（甘粛省天水県）は、永く官職を求める運動をし四十四歳（天宝十四年七五五）にして始めて率府の参軍事の官職を得、安禄山の乱、左拾遺への昇進、華州周功参軍への左遷、そして四十八歳（乾元二年七五九）の七月、その官を離れるといった長安集辺での目まぐるしい事態を経て、その直後に辿り着いた西城への玄関口に当たる町であり、また以後、結果的に見て、再び都へ帰ることのない放浪生活の出発点となったところで、それ故に、人生の一大岐路となった地点でもある。

この地に杜甫は約三ヶ月滞在し、約九十首[2]にも及ぶ多くの詩を作った。取り分けこの期のこれらの作品に、以前にはなかった急激でしかも強い隠逸的傾向が見られるのである。

さて先ず、鈴木氏の前掲書前項の隠逸の主因と隠棲に関する言及を紹介しよう。

同氏は、

「官をやめた杜甫は、始めて、隠逸ということを自己にひきつけて考えるにいたった。これまで、観念的に隠棲ということを考えなかったわけではない。しかしそこには現実がなかった。華州を離れて放浪の旅に上るにともない、いまや隠棲は杜甫自身の現実になった。「秦州雑詩」においても、隠逸の生活に思いをはせる。」

と述べられ、そして具体的な地名人名を挙げて隠棲の生活に思いをはせる詩を例に引かれておられる。それは次に挙げる(1)～(3)番までである。

(1) 阮籍　行くゆく興多からん　陬籍行多興
　　龐公　隠れて還らず　龐公隠不還
　　東柯に　疎懶を遂げん　東柯遂疎懶
　　鬢毛の斑を鑷むを休めん　休鑷鬢毛斑

（「秦州雑詩二十首」〈其十五〉）

杜佐が住んでいた東柯、その地に杜甫は土地を買い、実際に隠棲しようとしたおりもあったのである。「秦州雑詩」〈其十六〉には、東柯の地をたたえて、

(2) 薬を採りて　吾将に老いんとするも　採薬吾将老
　　児童には、未だ聞か遣めず　児童未遣聞

（「秦州雑詩二十首」〈其十六〉）

ともいう。

（中略）

杜甫は、この賛公の房の近くにも、土地を求めようかと考えた。

(3) 茅屋　買ふに土を兼ねん　　茅屋買兼土
斯焉ぞ　心の求むる所なり　　斯焉心所求
（云云）　　（云云）
柴荆　茶茗を具へ　　柴荆具茶茗
逕路　林丘に通はしめ　　逕路通林丘
子と　二老と成り　　與子成二老
来往せんは　亦　風流　　来往亦風流
（「寄贊上人」）

以上が同氏からの引用文であるが、今ここでは、その主因については後に論ずることにして、その隠棲について、同氏の挙げられた詩に若干考察を加え言及し、それ以外に見られるものを挙げ、更に隠逸的傾向全般に渡って論じようと思う。

まず、氏は、後漢末、名利を求めず、妻子を携えて鹿門山に逃がれ、薬を採って、隠棲した隠遁者、龐公（龐徳公）のことを、三国魏の阮籍と共に、上記(1)番に見られるように、隠棲への思いの一例として挙げておられる。また、この龐公に関して氏は、前掲書同項で、漢の隠者鹿皮翁や陶淵明等と共に杜甫が共感した隠遁者の一人として記しておられる。

しかし、この龐公に於ける隠棲に関しては、次に隠逸的・隠棲的傾向を有するものとして挙げる(4)・(5)番の二例、即ち、

(4) 昔者龐徳公　　昔者　龐徳公
未曽入州府　　未だ曽て州府に入らず

（云々）
挙家隠鹿門
劉表焉得取

（云々）
家を挙げて鹿門に隠る
劉表　焉んぞ取ることを得む

（「遣興五首」〈其二〉）

(5)
劉表雖遺恨
龐公至死蔵

劉表　恨を遺すと雖も
龐公　死に至るも蔵す

（「寄彭州高三十五使君適、虢州岑二十七長史参、三十韻」）

等と見られるように、氏が単に具体的な地名を記してでの隠棲、または隠逸者その人への思いの例として挙げられた以上に、またそれは別にしても、杜甫はこの隠者に自己を投影して、出て仕えず隠棲したいという願いを繰り返し歌っている。

実に、この時期、杜甫は個人的にはどの隠者よりも、龐公のようにありたいと願ったのであろう。

また、氏は上記(2)番を挙げ、先のように具体的な隠棲への思いの一例としておられるが、それは別にしても、この詩と同様の、即ち薬草を採培したいということに関しても、次の二例

(6)
曬薬能無婦
応門亦有児

薬を曬すに能に婦無からむや
門に応ずるに亦児あり

（「秦州雑詩二十首」〈其二十〉）

とあって、薬草を作るにも妻子の手助けがあると述べ。

(7) 何当宅下流　　何か当に下流に宅し
余潤通藥圃　　余潤　藥圃に通じ
三春湿黄精　　三春　黄精を湿し
一食生毛羽　　一食　毛羽を生ずべき

（「太平寺泉眼」）

と述べて、採薬隠棲と更には、羽化登仙への志向を表わしている。

以上見られたようにこのような詩篇と、上述の採薬隠棲した龐公や隠棲売薬をこととした漢の鹿皮翁[3]のこと等とを考え合わせれば、当時、杜甫は採薬隠棲を自己に引き付け、かなり真剣に考えていたことが明らかとなる。

他に、氏が言及されたもの以外で、つまり明確な地名を記さないまでも、隠棲的傾向を持つと思われるものには、次の二例、

(8) 更議居遠村　　更に遠村に居らむことを議す
避喧甘猛虎　　喧を避けて猛虎を甘んず

（「貽阮隱居」）

(9) 何時一茅屋　　何れの時か　一茅屋
送老白雲辺　　老を送らむ白雲の辺に

（「秦州雑詩二十首」〈其十四〉）

等がある。

以上のものとは別に、詩を例示することは割愛するが、この期に詩題、或いは詩中に、隠逸者（隠者的な人物は省略する）が多く現われるということがある。

例えば、すでに少し触れたが、氏が隠逸者への共感として言及された鹿皮翁・龐公・陶淵明等以外に、秦州の隠遁者阮昉、以前隣居したが河南に帰った隠者張彪[4]等といった人物がいる。

更にまた、詩中に、隠者に関係の深い典拠を持つ語句が頻出する。

例えば、〝鶺鴒（せきれい）（みそさざい）〟は『荘子』逍遙遊篇の「鶺鴒は深林に巣くふも一枝に過ぎず」という一句に基づき、〝箕潁客（きえいのきゃく）〟の箕潁は、昔、堯帝の時、許由という隠者がいたが堯が天下を譲ろうとしたので、潁水の北、箕山の下に遁れたという有名な伝説により、〝漉酒巾（ろくしゅきん）〟は『晋書』陶淵明伝の酒を愛し、自分の頭巾で酒を漉（こ）したという故事に基づき、また、〝桃花〟・〝武陵〟・〝桃源〟等は言うまでもなく同じ陶淵明の「桃花源記」に見える語句に基づいて引用しているといったように数多くある。以上はほんの一例に過ぎない。[5]

なお、この時代の作品の傾向を概括して言えば、これまで外、即ち社会に向いていた目が、この期に至ると、逆に内、即ち自己の方へと向かうといった作品が多く見られるようになる。[6]

つまり以前の政治的・社会的な要素の濃厚な題材から、より個人的・日常的・生活的な題材へと移項しているという現象である。

以上のことからも、この秦州時代に於いて、杜甫は、果たす果たさないは別問題にして、このような隠逸的傾向をか

なり強く持っていたということが明瞭である。

この秦州以前以後にあっても、このような傾向はあるにはあったが、これ程強く、しかも急激にこの傾向を持つに至った時期は、この期を置いて他に見当たらないと言える。

二

そこで問題となるのは、華州より秦州へ来て、上記のような傾向が見られるということである。

さて、ここで想起されねばならないことは、その移住の契機となった華州での官職を離れた事件である。

といっても、この官職を離れたことの経緯は、伝記的なことがほぼ知られている杜甫にあって、未だに不明な部分の一つである。

この官職を離れたことに関して、今日まで様々な説が行なわれて来た。その主なものを概略すると、

『唐書』は、当時、長安一帯が飢饉になったので、官を棄て、秦州に走ったと記している。(7) また、宋代以来の注釈書、更に、現在に至っては吉川幸次郎氏等の多くの杜甫の詩の研究家が、この唐書以来の伝統的な説を採っておられる。(8)

一方これに対して、

鈴木虎雄氏は、官を離れたその直後の華州での詩、「立秋後題」の〝罷官亦由人〟の句によって、官は他人のせいで罷めさせられたのであろうとしておられ、(9)

鈴木修次氏は、上記鈴木虎雄氏の説を受け、「三史三別」を代表とする一連の社会詩の筆禍によって辞めざろう得な

くなったとしておられる。(10)

また、現在中国の文学者、馮至氏は、杜甫が属している房琯一派の失脚に伴い、政治上の活路を失い、自発的であったとしても、官職を放棄せざるを得なかったとされている。(11)

以上のように大きく分けて二つの説がある。

今ここで問題となるのは、諸家が説かれておられるように、辞めるにせよ罷めさせられるにせよ、この官職を離れたこと——以下便宜的に「離官」という語を用いる——即ち、この離官を境にして、隠逸的傾向が強まったという事実である。

思うに、隠逸的傾向がこの離官の直後に急激に表われるということから、この両者が因果関係を強く持っているということになり、それ故、逆に離官によってこのような傾向が生じたと考えることができるであろう。

つまり、離官に対する反応、即ち感情の表われとして、この隠逸的傾向（取りも直さずその対極にある現世俗的なものに対する失望・落胆・消極等の表われ）が生じたのではなかろうかと。

離官、これは確かに杜甫にとって政治的事件でありえた。

とするならば、当然ここでそれ以前の政治的事件後の反応として表われる隠逸的傾向についても、更に溯って考えてみなければならない。

政治的事件、杜甫はこれまでに三度に渡ってこれを経験してきた。

一度目、鳳翔の行在所で左拾遺の官職を得た直後、宰相房琯弁護により、粛宗皇帝の怒りを買ったこと。

二度目、その房琯弁護が遠因となり、華州司功参軍に謫流されたこと。

三度目、今回の離官である。

しかし、各々の政治的事件後の隠逸的傾向に関しては、先に少し触れたが、一・二度目の後は、詩の例を挙げるまでもなく、三度目に較べ極めて少なくほとんど問題にするに足りないのである。これは言うまでもなく、隠逸的傾向が三度目の後に集中していることを物語っている。

三

ともかくも、隠逸的傾向の集中はは明確であるからには、次に視点を換え、上記の各々の事件後に杜甫は一体どのような反応を示すかということに関して、詩を挙げ、具体的にその感情を探り、ついで、隠逸的傾向の主因について論じよう。

一度目、房琯弁護後、長安での作、例えば次の(10)・(11)番、

(10) 細推物理須行楽　細に物理を推すに　須く行楽すべし
何用浮名絆此身　何ぞ用ひむ浮名　此の身を絆すことを
（「曲江二首」〈其一〉）

(11) 吾今意何傷　吾　今意何をか傷む
顧歩独紆鬱　顧歩して独り紆鬱たり
（「画鶻行」）

二度目、華州左遷後、例えば(12)・(13)番、

(12) 故人還寂寞　　故人　還た寂寞
削迹共艱虞　　迹を削られて共に艱虞
（「贈高式顔」）

(13) 何人却憶窮愁日　　何人か却て憶はむ窮愁の日
日日愁随一線長　　日日　愁は一線に随って長きことを
（「至日遣興、奉寄北省旧閣老、両院故人、二首」〈其一〉）

三度目、華州離官後、秦州での作、例えば(14)・(15)番、

(14) 清渭無情極　　清渭は無情の極
愁時独向東　　愁時　独り東に向ふ
（「秦州雑詩二十首」〈其二〉）

(15) 万方声一概　　万方　声一概
吾道竟何之　　吾道　竟に何くにか之かむ
（「秦州離詩二十首」〈其四〉）

以上のように、政治的事件以後の反応として各々の感情が表われている。

それは、一見しても分かるように、憂愁の感情である。つまり政治性を帯びた事件に伴う憂愁の感情、即ち挫折感、約言すれば、政治的挫折感と言えるであろう。

上記のものを概略すれば、一度目房琯弁護以後は、酒に託し、絵に事寄せて自ずから消遣しており、二度目華州左遷

以後は、左遷後の困難を嘆き、朝廷の知人に窮愁を吐露しており、三度目華州離官以後は、東のかた都長安へ独り流れる渭水に極まりない無情を感じ、自分の進むべき道すら判らないと慨嘆している。

今挙げた作品に見られるように、各々の政治的事件以後の感情として、様々に憂愁を述べるが、三度目華州離官以後のものは、一度目・二度目のものに比べ、例えば上記(15)番に於いて〝吾道（わがみち）　竟（つい）に何（いず）くにか之（ゆ）かむ〟と述べているように、同じ憂愁を歌っても遣り場のない絶望的な憂愁を表わしていることが容易に分かるであろう。

このことからも明らかなように、この三度目の華州での離官以後の感情は、以前のようなものと質的に全く異なっている。

事実からしても、今回のこの感情は官吏から無官に降るという衝撃的な事態を伴って起こる感情の現われを十分に表出していると考えられ、またそれが故にも、以前の二度の事件（一度目房琯弁護以後、杜甫はなお左拾遺の官にあって、長安で酒に浸り憂愁を紛らわしていた。例えば「曲江二首」「曲江対酒」「曲江対雨」等。二度目華州左遷以後、杜甫は上述のような憂愁はあったものの華州司功参軍の官にあって、一方で盛んに一連の社会詩を作っていた。例えば「三吏三別」を代表とする政治性・社会性を濃厚に帯びた作品等。）と同等には論ぜられないということになるであろう。

つまり、華州での離官は杜甫にとって致命的な政治的挫折感を伴うものであったと言えるであろう。

さて、この三度目の感情は以上のようであったが、更にそのことを裏付けてくれるものに、次のような事実が見出される。

それは秦州以前まで一定して持続していた言動が、秦州へ来て急変するという事実である。

即ち、まだ長安周辺で官職を求めていた時代、次の詩に、

(16) 致君堯舜上　君を堯舜の上に致し
再使風俗淳　再び風俗をして淳ならしめむと

（「奉贈韋左丞、二十二韻」）

と述べ、〃自分は、今上陛下をいにしえの聖天子堯・舜の位置に導き、天下の風俗を淳正にしよう〃と言った言葉が、最初の官職（右衛率府兵曹参軍事）に就いた直後の次の詩に於いても、

(17) 生逢堯舜君　生れて堯舜の君に逢ふ
不忍便永訣　便ち永訣するに忍びず

（「自京赴奉先県、詠懐、五百字」）

と述べ

房琯弁護以後の次の詩に於いても、

(18) 雖乏諫諍姿　諫諍の姿に乏しと雖も
恐君有遺失　君に遺失有らんことを恐る

（「北征」）

と述べ

また、華州左遷直前の次の詩に於いても、

(19) 意内称長短　　意内　長短に称ふ
終身荷聖情　　終身　聖情を荷ふ
（「端午日賜衣」）

と述べ

更には、華州左遷への出立時の次の詩にあってさえ、

(20) 近侍帰京邑　　近侍して京邑に帰る
移官豈至尊　　移官　豈に至尊ならむや
（「至徳二載、甫自京金光門出、間道帰鳳翔、乾元初、従左拾遺、移華州掾、與親故別、因出此門、有悲往事」）

等と述べ、皇帝に対する献心・忠誠・信頼等を表わす言動が、秦州以前まで一定して持続していたのである。

ところが、華州離官後、秦州の作、次の詩では、

(21) 唐堯真自聖　　唐堯　真に自ら聖なり
野郎復何知　　野郎　復た何をか知らむ
（「秦州雑詩二十首」〈其二十〉）

と述べ、〝帝は自ずから聖明であらせられるので自分のような何も知らない者はかれこれ言うべきでない〟と言うのである。

更にはまた、今のような感情を暗に表明するものとしては、次のような詩がある。

(22) 呑声勿復道　　声を呑みて復た道ふこと勿れ
　　真宰意茫茫　　真宰　意茫茫たり
　　（「遣興二首〈其一〉」）

と述べ、

また、

(23) 去去才難得　　去去　才　得難し
　　蒼蒼理又玄　　蒼蒼　理　又玄なり
　　（「寄岳川賈司馬六丈、巴州蔵八使君、両閣老、五十韻」）

とも述べて、天意は一体奈辺にあるのか判らないと慨嘆し、懐疑を投げ掛け、暗に天子に対する言うにいえない不満と不信感を漂わせているようである。

何れにしても、あれ程、官職を求めることに燃えた男が、また、あれ程、政治に執着を燃やした男が、官職を離れ自由にものが言えるようになったとはいえ、一時的にせよこのように深く慨嘆する裏には、華州での離官が政治に対する手ひどい打撃を彼に与えたのであろう。

このことからも、上述のように、離官以前の挫折感はそれ程のものでなく、逆に離官後の挫折感は彼にとって、決定的なものであったと言えるであろう。つまり、絶望的で致命的なダメージを与えた政治的挫折感であったと言えるであろう。

四

以上述べてきたことから、「秦州で急激に表われる隠逸的傾向の主因は、華州離官での致命的な政治的挫折感であった。」とするのである。

つまり、その厭世的な秦州での急激にして、しかも強い隠逸への傾斜は、政治性を濃厚に帯びた、深く精神性に基づくところの挫折感から来るものであったとするのである。

それが故に、最初のところで紹介したが、鈴木修次氏は、隠逸を自己にひきつけて考えるにいたったのは、官を辞め華州を離れ放浪の旅に出るに伴って、つまり状況的・環境的変化の要因によって、現実化したとされ、隠棲への思いの具体的な例を引かれて実証されておられたが、そのような単なる外的理由だけではなく（言わばそれは現象面に過ぎない。しかしまたそれも事実の一面に違いないが）それよりもむしろ根源的には、華州離官の致命的な政治的挫折によってさいなまれ、極度に昂揚し尖鋭化された神経の然らしめたものであると言えるであろう。

また、その隠逸的傾向こそは、その昂揚し尖鋭化された神経の自然な帰趨として、その対極的な位置にある反政治的な逃げ場・安らぎの場・安息の場であったと言えるであろう。それがたとえ、再度に渡る官職復帰への一種のポーズとしてのこのような傾向の表明であろうとも。

因に、秦州直後、同谷（甘粛省成県）での杜甫に若干触れておけば、生活上の困窮は、「乾元中寓居同谷県、作歌、七首」其一で〝歳々（としどし）橡栗（しゃうりつ）を拾（ひろ）うて狙公（そこう）に随（したが）ふ〟などと歌うように、秦州よりもその困窮の度を深めているが、秦州での

昂揚した神経はかなり沈静し、幾らか自嘲的な詩を作り、一種の諦観にも似た気分を表出するに至っている。

またこのように、その政治的挫折感の存在が明確になれば、上述の『唐書』の説を始め、一連の伝統的な注釈書、及び研究家が言われるように、単に当時飢饉だけで官を棄てたとは到底考えられない。むしろ、その経緯は明らかにならないまでも、その間には強く政治性を帯びた尋常一様ならぬ悶着が存在したと見る方が妥当である。

そのような意味合いから、上述した鈴木虎雄氏・鈴木修次氏や馮至氏等の説を、その説に関しては今後まだまだ考究せねばならないが、私は支持する次第である。

おわりに

すでに前章の冒題で、秦州で急激に表われる隠逸的傾向の主因については結論を述べたので、ここでは、なおその傾向の主因となった華州離官での致命的な政治的挫折感の存在を明確にすることの意味について補則しておく。

私は、表面に顕われる隠逸的傾向はさりながら、その傾向の主因となって裏面に潜む政治的挫折感の存在は非常に重要なことであると考える。というのも、この華州での致命的な政治的挫折感の有無は秦州時代の詩——例えば、この期に杜甫は生涯にあって最も鬼気迫る尖鋭な詩を書いたことに関しても、吉川幸次郎氏が言われておられるように状況的・環境的変化の要因[12]は勿論のこと、それよりもむしろ、根源的には華州離官に伴う挫折感によって昂揚し砥ぎ澄まされた神経が、杜甫をしてそのような尖鋭な詩を書かしめたと言えるように——またひいては以後の詩——例えば、同谷を経て辿り着いた四川成都での詩は、非常に喜びに溢れたものだとし、生活は彼にとって人生で最も幸福であったと一般

に言われているが、上記の離官の致命的な政治的挫折ということを重視し、杜甫のより深く内奥なる精神性から推し測れば、これすらあくまで小康を得たに過ぎないのであって、一概にそのようであったと簡単に決めつけることは難しいことだと言えるように――彼の死に到るまでの作品、即ち約四分の三を占める多くの作品を見る場合、また、彼の人生そのものを考える場合――例えば、一般に杜甫の生涯が何期かに分類されているが(例を挙げれば、鈴木虎雄氏は八期、吉川幸次郎氏は四期)[13]、この離官ということに焦点を合わせれば、求官・仕官の言わば前向きの時代と秦州以後の放浪生活という後向きの時代の二つに大きく区分することもできるように――その底流となる精神性に於いて、非常に重大なポイントになるからである。

それが故にも、この華州離官での政治的挫折感の存在を明確にすることは極めて重要なことであると思われるからである。

注

(1) 同氏著『唐代詩人論』(鳳出版・昭四八年刊)所収。

(2) 清、仇兆鰲『杜少陵集詳註』に依る。

(3) 鹿皮翁「遣興三首」〈其三〉に、〝但訝鹿皮翁、忘機対芝草〟と見える。鹿皮翁は『列仙伝』に見える漢の隠者。

(4) 阮昉、「貽阮隠居」「秋日阮隠居致薤三十束」。張彪、「寄張十二山人彪、三十韻」。この張彪に関しては、鈴木氏は前掲書同項で、秦州で詩を寄せた友人・隣人として言及されている。

(5) 鶺鴒。「為報鶺鴒行旧、鶺鴒在一枝」(「秦州雑詩二十首」〈其二十〉)
箕潁客。「足明箕潁客、栄貴如糞土」(「貽阮隠居」)
漉酒巾。「謝氏尋山屐、陶公漉酒巾」(「寄張十二山人彪、三十韻」)
桃花。「船人近相報、但恐失桃花」(「秦州雑詩二十首」〈其十三〉)

武陵。桃源。「如行武陵暮、欲問桃源宿」（「赤谷西崦人家」）

(6) これまでの就職運動の詩・戦争、戦乱関係の詩・就官時代の贈答、送別等の詩・一連の社会詩等に対して、この時期は、消遣の詩・二十首にも及ぶ連作の詩・日常集辺のものを読んだ、主に二字の題を有する詩等の個人的なものが多い。

(7) 『唐書』巻二百一列伝第一百二十六文芸上（附杜審言伝）杜甫伝に〝従還京師、出為華州司功参軍。関輔飢、輒棄官去、客秦州、負薪採橡栗自給〟と見える。

(8) 宋代以来の注釈書。南宋の『分門集註杜工部詩』（四部叢刊本）巻四「秦州雑詩」の題注、『草堂詩箋』（古逸叢書本）巻十五同詩の題注、降って清の朱鶴齢輯注『杜工部詩集』（杜詩又叢本）巻五「立秋後題」の題注、更に、吉川幸次郎氏。同氏著『吉川幸次郎全集』（筑摩書房刊）巻十二「秦州の杜甫」等に見られる。

(9) 同氏著『杜少陵詩集』（国民文庫刊行会刊）巻一「総説」

(10) 前掲書所収「杜甫『三吏三別』の特異性」

(11) 同氏著『杜甫伝』（人民文学出版社刊）「隴右的辺警与艱険的山川」

(12) 同氏著、前掲書所収「鼓角」に〝今は天水県（秦州）と呼ばれるこの国境の町の異様な風物は、杜甫の神経を極度に刺戟して病的にまで尖鋭な詩を生んだ〟とある。

(13) 両氏、各々前掲書に見える。